



キリスト者として生きる

現代社会の座標軸をもとめて

第9回

森本あんり

もりもと あんり
国際基督教大学教授

まことの權威

わたしたちのもとに、ひとりのみどり子としてお生まれになった方を思う季節になりました。

インドのコルコタにある「孤児の家」には、マザー・テレサの次のような言葉が掲げられています。

「人々は、理性を失い、非論理的で自己中心的です。それでも彼らを愛しなさい。あなたがしたい行いは、明日には忘れられます。それでもいい行いをしなさい。あなたが歲月

を費やした建物が、一晩で壊されてしまうことになるかもしれない。それでも建てなさい。ほんとうに助けが必要な人々ですが、彼らを助けたら、彼らに襲われてしまうかもしれない。でも彼らも彼らを助けなさい。もっている一番いいものを分け与えらるると、自分

ひどい目にあうかもしれない。それでも、一番いいものを分け与えなさい。……」（ルシ
ング・ヴァーディ編、猪熊弘子訳『マザー・
テレサ語る』早川書房刊より一部抜粋）

これを読んで、みなさんはどのように感じられるでしょうか。ここには、自分に損なこ
とや危険なことをしなさい、という命令があ
ります。誰でも、そんなことはしたくありま
せん。人間の生存本能に反しています。わた
したちのうち、おそらく九九パーセントの人
は、この言葉に従うことができないでしょう。
「そんなのは、ただのきれいな事だ」とうそぶ
くこともできます。

だが、どんなに反発しても、なおわたしたち
は、心の片隅で、それこそが人間のあるべき
真実の姿だ、ということに納得しているの
ではないでしょうか。

なぜだか説明できないけれど、やっぱりそ
れが真実だ、と納得してしまう力——それを
「權威」といいます。「權威」という言葉は、
今日あまり評判のよいものではありません。

「權威」というと、わたしたちはすぐに「權
威主義」を思い出します。權威主義者という
のは、何事によらず自分や他人の權威を振り
かざす人のことですが、それが「權威」の本
質ではありません。むしろ、振りかざしてい
る限り、それは權威ではありません。振りか
ざさずとも、おのずと人々が納得してしま
うのが權威だからです。

權威は、そもそも自分で主張するものでは
ありません。どんなに自分で主張しても、周
りの人が認めてくれなければ、權威は權威に

わたしたちの社会は、今あらゆるところで、

権威の失墜を目の当たりにしています。だがしかし、わたしたちはなお、人の声を越えたところから響く、真実の権威に聞く心を、どこかで持ち続けています。

マザー・テレサの言葉は、そのことを思い起こさせてくれます。というより、理不尽なはずのその言葉に、何がしかの真実を感じてしまうわたしたちの心が、そのことを教えてくれます。

ならないでしょう。あるものに内在的に備わっていて、人々が思わず「なるほどなあ」と納得してしまう力。略して「なるほど力」——これが権威です。

政治学者たちは、しばしば「権威」と「権力」とを区別します。権力は、人々が納得しようとしまいと、否応なく何かを実行することのできる力です。平たく言えば、「言うことを聞かせる力」です。必要とあらば、むりやりにも言うことを聞かせる力。たとえば、「国家権力」は、そのような強制力やそのための装置をもっています。けれども、マザー・テレサの言葉には、そのような「権力」はありません。従わなくとも、罰せられることはありません。しかし、たとえ人々が従わなくても、その言葉にはな

お「権威」があります。逆に、「従わなければ罰せられるから従う」「いやいやだけれどしかたがないから従う」のであれば、そこに権威はありません。「なるほど力」がない、ということです。

「権威」は、すぐれて宗教的な概念です。聖書によれば、イエスは「悪霊を追い出す権威」をおもちでありました。誰も、「権力」によつて悪霊を追い出すことはできません。お巡りさんが来ても、悪霊は追い出せないのです。「政治の力で、ここはひとつ何とか」というわけにはゆきません。イエスの権威は、悪霊も認める権威でありました。

わたしたちの社会は、今あらゆるところで、権威の失墜を目の当たりにしています。だがしかし、わたしたちはなお、人の声を越えた

ところから響く、真実の権威に聞く心を、どこかで持ち続けています。マザー・テレサの言葉は、そのことを思い起こさせてくれます。というより、理不尽なはずのその言葉に、何がしかの真実を感じてしまうわたしたちの心が、そのことを教えてくれます。

だから万人がその言葉に従うだろう、というのではありません。たとえ従えないとしても、なおそこに、多くの人が真実の響きを認めることができる。そのことが、わたしたちの世界に残る、かすかな希望の根拠なのです。いつもは従うことができない。たぶん一生できないかもしれない。でもいつか、その呼び声に応えることができる時が、あるかもしれない。いや、多くの人の人生の中で、歴史の中で、実際にそういう場面がいくつもあつたのです。マザー・テレサだけではありません。もつと身近なところで、有名な人も、そうでない人も、人知れず、どこかで、その呼び声に呼ばれてきた、そういう人が無数にいるのです。

けつして英雄ではない。だが、怖れを越えて、不利益を越えて、本能を越えて、魂への呼びかけに呼ばれてきた人々が確かにいる。そして、わたしたちの誰もが、そうなる可能性をもっている。そのことが、人間のもつとも人間らしいことであり、人間を最終的に人間たらしめることなのではないでしょうか。Ω